慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トマス・ホジスキンの生産力論 : トマス・ホジスキンの経済学研究 (一)
Sub Title	Thomas Hodgskin's theory of productive power : a study on Thomas Hodgskin's political economy (1)
Author	神代, 光朗
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1968
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.61, No.5 (1968. 5) ,p.596(90)- 617(111)
JaLC DOI	10.14991/001.19680501-0090
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19680501-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トマス・ホジスキンの生産力論

――トマス・ホジスキンの経済学研究（一）――

神代光朗

はしがき
一、ホジスキンの課題及び理論的諸前提
二、生産力論
三、生産力の発展と労働者階級の状態、及び生産力の発展の阻止的要因。
むすび

はしがき

本稿はトマス・ホジスキンの経済学説のうち、生産力論に該当する部分を取りあげた研究ノートである。彼の経済学のうち生産力論に該当する部分は主として、『人民の経済学』(Popular Political Economy 1827) で扱われており、『労働弁護論』(Labour Defended 1825) 及び『自然的財産権と人為的財産権比較論』 (The Natural and Artificial Right of Property Contrasted 1832) においても、わずかながら、それに言及している。本稿では『人民の経済学』を中心に検討することにする。

一、ホジスキンの課題及び理論的諸前提

一八二四年に団結禁止法 (Combination Law) が撤廃されて以後、イギリスにおける労働運動は昂揚した。そして、主要産業の労働組合は、賃銀引上げを要求して団結し、ストライキを組織して闘った。イギリス資本主義はようやく産業革命を確立し、全体としてみるならば、大きな発展の時代にあったが、一八二五年の後半には最初の全般的過剰生産恐慌を招き、はやくも資本主義は自己の内部から自己を否定する矛盾を顕在化させてきた。都市においては、プロレタリアートの抬頭と小生産者の没落が著しくなり、これらの勤労諸階級と資本家の階級対立が激しくなってきた。このような状況において、資本家、地主、及び彼らの政府や彼らのイデオローグ達は、労働者の団結した賃銀引上げ闘争は資本をして、より有利な条件を求めて国外に追い出させることになり、その結果、イギリスの産業は衰微して、結局は労働者自身にとっても不幸の原因になるであろうという口実[1]のもとに、再び団結禁止法を復活せんとし、一八二五年には前年の法律の修正案を通過させた。彼らの理論的根拠は古典経済学、とりわけリカードの体系の俗流的側面である資本の蓄積が国富を増進するという命題及びそれをさらに俗流化した資本こそ生産的であるという命題であり、これはリカード以後の経済学の混乱期において、マルサスの人口論や、賃銀基金説とむすびついて、ブルジョアジーの理論的支柱になっていたものである。

このような状況において、トマス・ホジスキン (Thomas Hodgskin 1787～1869) は、資本の不当な要求に対して、労働者階級を弁護するという実践的課題を自らに課したのであった。彼の中心的課題は労働者の団結した賃銀引上げ闘争に味方して、資本家やそのイデオローグ達の資本国外逃亡論を反駁し、資本の不生産性を、そして労働こそが生産的であり、それ故に、労働こそが生産物のすべてを受けとる権利があり、資本の分け前、従って、利潤は不当であることを証明することにあった。そのためには、彼は当時のブルジョアジーの理論的支柱であった、資本蓄積が国富を増大させるという命題、マルサス流の人口論、賃銀基金説を批判しなければならなかった。

彼はこの課題を、リカード[2]の労働価値説と剰余価値論を摂取して資本の不生産性を暴露し、資本はそれが蓄積された過去の労働もしくは資本家の手に貯えられた何かあるものであるが故に利潤を得るのではなく、労働者の労働及び熟練に対する支配権を獲得する手段であるが故にその所有者に利潤をもたらすのであると述べて[3]、資本物神を不充分ながらも批判し、資本の本質の解明に接近することによって達成せんとしたのであった。その際、彼は価値増殖過程をすべて労働過程に還元することによってその論証を行おうとしている。それ故に、彼の資本不生産性論は資本に対して、労働過程における主体的要因、即ち、生産的労働を単純に対置させることに基づいているのであり、従って又、生産力論を基軸に展開されているといえるのである。従ってホジスキンの経済学体系の中では、資本に反対するさいに、彼のいわば積極的論拠として、生産力論が重要な位置を占めているのである。

次に、ホジスキンの生産力論に入る前に彼の経済学の基礎をなしていると思われる理論的諸前提のいくつかに言及しておこう。

(1) 全労働収益権及び搾取の認識。

ホジスキンは、「すべての富は労働によって作られる。そして労働の生産物でない富は何もない。[4]」と述べ、従って、労働にもとづく所有のみが正当であり、所有は本来的には労働にもとづくべきであると考える。これは自然の法則の命ずる所であり、彼はこれを自然的所有権 (the natural right of property) と名づけている[5]。これは彼によれば正義の所有であり、労働者の全労働収益権 (the right to the whole produce of labour) である。ところが、現在の社会状態においては富の所有は労働にもとづいて行われずに、何ら富を生産せず、従って又、労働をしない人々（資本家、地主、僧侶）や政府が富を所有している。彼はこれを法定財産権或は人為的財産権[6] (the legal right of property, the artificial right of property) と名づけている。彼によればこれは、自然法に逆らう不正義の所有である[7]。

それでは人為的財産権は何にもとづくのであるか。彼らは何ら労

働をしないのだから、直接生産者から略奪する他は富を所有することは出来ない。換言すれば直接生産者は自らの生計に必要な労働より多くの労働を（即ち、剰余労働を）労働しない人々のために与えねばならない。[8] 彼はここで不生産階級の搾取を認識する。しかし、ホジスキンの搾取の認識は自然的所有権に反するもの、全労働収益権を侵害するものとして把えられ、このような搾取にもとづく所有は不正義な・不当な所有として極めて倫理主義的に理解されている。[9] そして彼はこのような不正義な所有は取り除かれねばならないと考えるのであるが、その際、彼の批判はこの不正な所有を維持する目的でつくられている法律や、政治や、[10] 国家権力に集中する。だが彼は搾取を経済的な過程として把握しない。彼によれば、現在の社会の利潤は資本家が、土地貴族からうけついだ他人の労働に対する支配権によるのであり、土地貴族の支配は彼らによる土地の占有に起源を発するのである。そして、「土地の占有は剣によってなされたのであって、法律によってではない。しかし法律は剣が獲得したものを後で維持しようとした。」[11] のである。

(2) 自然と人為

さて、ホジスキンは現在の社会状態、即ち資本主義社会の搾取について、先のように認識した後に、資本主義社会そのものの一層の究明へとすすむのであるが、その際、彼が採用した方法は自然と人為の対立という考え方であった。[12] この方法そのものはジョン・ロックの自然法――即ち、ブルジョアジーが封建制を批判するために用いたものであり、ブルジョアジーの間では既にベンサムの功利主義にとってかわられ陳腐なものになっていた。ホジスキンはこのブルジョア革命の論理をもって、勤労諸階級の立場から、ブルジョア社会を批判したのであるが、問題は彼がこの方法によって、どの程度まで資本主義社会の矛盾、生産力と生産関係の矛盾を把握しえたか、或は、この方法がどの程度までそれを把握するのに有効な方法であったかということである。ホジスキンが解釈している自然というのは、彼によれば『神』[13] (Deity) とも同義語であり、永遠不滅の法則をもって、すべてを統制するのである。そして人間の社会においては、自然の法則は人口の増加、知識及び発明の増加、分業の拡大、生産力の発展を規定し、人類がその法則に従うかぎりは生産力は無限に発展するというのである。又、自然の法則によれば土地に関する自然的財産権は縮小すると考えられる。これは、狩猟から牧畜へ、牧畜から農業へ、さらに、技術段階の低い農業から農業における技術の改善へという、生産の技術的変化にともなって、自然が、人類の労働の範囲及びその生活必需品の範囲に従って設定する・必要な土地面積が縮小するからである。[14] このようにして、ホジスキンは生産力の発展を自然の法則によるものとみなしている。[15] しかし、所有形態に関しては、自然的社会というのは、全労働収益権の実現される社会であって、自然的財産権は量的には変化するが質的には何ら変化をせず、『不動点』[16] であり、現実的なものに対する理想的なもの、不正義に対する正義として観念的に把握されている。これに対して、彼は人為を自然に対する侵害として、不正義として把え、人為的財産を自然的財産に対する侵害にもとづく財産と規定し、具体的には

地主による土地と農奴の所有、資本家による利潤及び資本の所有がそれであるとした。従って、彼は、現在の財産制度にもとづく社会即ち、資本主義社会をも自然的社会に反する人為的な、不正義の社会となしたのである。この点はホジスキンの自然法の特徴である。[17] だから、彼は経済学においてと同様に、その理論的諸前提においてもブルジョアジーの武器を、勤労諸階級の立場からブルジョアジーに向けて、逆用したのである。[18]

ホジスキンは生産力と生産関係の矛盾を自然と人為との対立という極めて、幼稚で素朴な表現の中において即自的に認識したのであった。彼の用いたこの方法はその限りにおいては、何程か科学的批判のための武器になり得たのである。すなわち、現存する資本主義社会のすべての矛盾を自然的なもの、宿命的な不可避的なものとして是認し、肯定しようとする俗流的な資本弁護論に対し、彼は自然と人為の対立という両刃の剣で立ち向かうのである。例えばホジスキンは人口の増加と労働者階級の貧困を自然必然的な関係として正当化しようとする俗物マルサスに対して、自然的な社会においては、人口の増加こそ生産力を増大せしめ、人類社会を無限に発展せしめる決定的モメントであるにもかかわらず現在の人為的社会においては資本家が労働者階級を搾取することが後者の貧困の原因であり、人口の増加を逆に妨げ、結局、人類社会の進歩を妨げていると考えるのである。そしてマルサス流の人口論は、資本家が労働者階級の貧困の原因が自分達の搾取にあることをごまかすための口実にすぎないとするのである。[19] しかしながら、ホジスキンの自然と人為の対立という図式によっては、生産力と生産関係の矛盾は正しく認識され得ない。彼は奴隷制、封建制、資本制という、特定の歴史的な生産関係にもとづく社会を、すべて、自然に対する人為の侵害とみるのであるが、この場合、侵害の内容は、彼によれば、暴力、法律、政治、国家といったものであり、もっぱら経済外的な諸制度を意味している。これを彼は社会的諸規制 (social regulations) と名づけているが、資本家や地主は単にこの社会的諸規制の担い手としてしか把握されていず、歴史的に特殊な生産関係としての資本及び土地所有の人格的表現としては把えられていない。だから彼においては、資本家、地主、僧侶、国家はすべて立法家階級 (legislating class) という概念で一括して把えられ、資本は、生産関係ではなくて資本家が詐欺行為を行うために発明した用語として、即ち主観的な欺瞞として把握されるのである。[20] だからホジスキンにおいては結局のところ、生産関係は上部構造に解消されてしまい正しく認識されることが出来ない。彼は階級支配を認識してはいたが、それを上部構造的にしか把えなかったので、少なくとも彼のもっとも卓越していた時期（一八二三年～三二年）[21] においては国家や法律の階級性を認識し、その立場から批判していた[22] にもかかわらず、資本（或は資本家）と国家及び法律の相互の関連を正しく把握しなかったために結局、晩年には単に国家一般、法律一般、政治一般に対する批判に移っていってしまうのである。[23] 彼は又、人類の歴史を自然と人為の闘争及び前者の後者に対する勝利の過程として把えている。ここにおいては、彼は生産諸力の発展と生産諸関係の矛盾、及び生産諸関係の変化を

漠然と自然の人為に対する勝利として認識しているのであるが、しかし、あくまでその程度の認識でしかなく、決して、生産諸力と生産諸関係の矛盾そのものとして把えているのではない。ホジスキンには、明確に生産関係という概念はないのである。従って、スタークやアレヴィがホジスキンの歴史観を史的唯物論を含んでいるとか、或は言葉の正しい意味で史的唯物論だと主張しているのは誤まりである。[24] ホジスキンは認識論的にはロックやベイコンの機械的唯物論を踏襲しており、[25] 彼の歴史理論においては自然と人為との対立は絶対的で機械的な対立として把えられ、生産力視点が中心にすえられている意味においては唯物論的であるが、[26] 同時に、彼における自然と人為の対立は理想と現実との対立であって、その意味において、彼の歴史観は目的論的であり、観念的である。[27] 彼は、歴史を、事実上は、原始共同体―奴隷制―封建制―賃銀奴隷制（資本制）として進化の過程として把えているが、これは歴史的事実がそのような順序で進行したからであって、それらの各々の社会の発展の内的関連及び運動の仕方は把えられていない。

このようにして、ホジスキンの自然と人為の対立という図式は、俗流的な資本弁護論に比べれば科学性をもっていたが、しかしこの図式そのものの中に非科学性が同時に存在していたのである。

(3) 自由主義及び全労働収益権との矛盾

さて、ホジスキンは自然と人為の対立及び前者の後者に対する勝利として歴史をみたのであるが、その際彼の理想とする自然的な社会は何らかの立法措置や政策によって達せられるものではなく、

又、革命によって達せられるのでもない。ホジスキンのとる方策は要するに、自然のおもむくところにまかせよという自由放任（レッセ・フェール）であった。彼は自然の法則に従えば、人口増加にもとづいて知識と技術が発展し、不熟練労働の漸次の消滅及び各人の平等化がおこり、その人格のうちに同時に労働者と資本家の二つの性格をかねそなえた中間階級（middle class）が生じ、その結果、現在存在している一切の隷属及び抑圧が消滅し、全社会が自由で平等な人々によって構成され、彼の理想とする自然的社会が実現されると考える。[28] そして、既にそのような中間階級が抬頭しつつあるというのである。なぜならば、彼に従えば、自然の法則は人為的諸規則にもかかわらず恒常的に、不変の法則として作用しているからである。彼は、このような社会を実現するために労働組合を手段として認めたが、それは労働者間に存在している偏見を排除し自由な労働を実現するための、又、資本の要求の不当性を労働者に認識せしめるための啓蒙教育機関としてであった。[29] かくして、彼の理想とする中間階級の社会（熟練労働者を中心とする・直接生産者の自由な小商品生産社会と思われる）においては自由競争の原理が働き、なおかつ、労働の全収益権が実現されるというのである。しかし、果たして、自由競争と全労働収益権は矛盾しないだろうか。この点についてはホジスキン自身、困難を感じていた。彼は『労働弁護論』の中で、資本を共存労働と熟練とに還元した後に、共存労働にもとづく生産即ち、社会的分業にもとづく生産においては、労働者は各人が相互に依存しあい、一人では何物をも生産しないのだから、この場合、いかにして労働の全収益権を確保しうるかという問題にぶつかった。[30] これに対して、彼は結局、生産物のうちどれだけが各々の労働者に属すべきかは各労働者の自由な判断にまかせるべきであり、スミスのいわゆる『市場のかけひき』によって万事うまくゆくと楽観的に考えていた。[31] しかし、現実には自由競争の原理はそれ自体が資本蓄積を生じ、労働の全収益権を侵害するものなのである。彼は資本制生産の基礎である商品生産はそのままにして、その結果である富の分配の不平等、資本家の不当な分け前である利潤、全労働収益権に対する侵害を取り除こうとしたのであった。ここに彼の体系の矛盾がはっきりと表現され、彼のユートピアン的側面が顕著に示されている。これは彼が、全労働収益権の侵害を、資本制生産の基礎そのものから生ずるものとせずに、経済外的な原因によるものとする立場からして必然的にうまれる帰結であった。ホジスキンのこの矛盾は、もとは自由主義者であり、当時はオウエン主義者であったウィリアム・タムスン（William Thompson 1775-1833）によって、その著『労働報酬論』（Labour Rewarded. London 1827）の中で批判されている。[32] タムスンは全労働収益権の実現を競争の中にではなくて、オウエン流の協同組合社会の中に求めている。

(4) 労働過程と価値増殖過程の混同。後者の前者への還元

ホジスキンは資本の不生産性を論ずるにあたって、資本を生産関係として理解していないので、資本の生産過程を単純な労働過程と同一視し、すべてそれへ還元することによって証明している。『労働弁護論』において、彼は資本を流動資本（パン、ミルク、衣類等の生活諸手段）と固定資本（機械、建造物、船舶、道路等の労働諸手段）に分類したあとで、前者は資本家の手に貯えられたものではなく、又、そのような貯えによってその効果をもつのではなく共存労働（co-existing labour）によって生産され、その効果をもつこと、後者はその働きを過去の対象化された労働によってではなくて、現在の生きた労働と熟練によってひき出すのであり、それなしには価値が低下して朽ち果てることを述べて、資本は生産的ではなく、共存労働及び熟練こそが生産的であり、生産的資本というのは熟練労働と同じだと結論するのである。[33] 彼は資本の不生産性に関するこの論証において、従来の経済学者達と同じ前提にたっているわけであり、資本はやはり物と同一視されている。[34] だから彼は資本の生産性を云々する場合、それが価値に関してなのか、使用価値に関してなのかを区別していないことによって失敗している。[35] ただ彼が経済学者達と異なっている点は資本の生産過程をすべて労働過程に還元した後で、経済学者達は資本の労働に対する支配を、つまり労働者に対して、自立した・疎外された諸条件としての資本を当然の・必然的で自明の関係と考えていたことによって、この関係を技術的にも正当化しようとして労働の主体的条件に対して客観的な・対象的諸条件を重視するのであるが、[36] 彼は逆に主体的なもの、即ち生きた労働を客体的なもの、即ち過去の労働・対象化された労働に対して重視し、後者は前者に比べれば無に等しいと考えるのである。[37] このことは労働過程に関する限りは客観的諸条件の過小評価であり、正しくないが、しかし、経済学者達の拝物主義に比べれば、はるかに積極的な

意義をもっているのであって[38]、彼はそのおかげで、もう少しで資本の本質を暴露するところまで近づくことができた[39]。しかし、結局のところ彼は労働過程と価値増殖過程を混同し、剰余価値と剰余労働を混同[40]して、資本の本質を正しく把握することに失敗したのである。

注（1）『労働弁護論』においてはハスキッソン、及びランズダウン侯がこの論者として引用されている。「ハスキッソン氏は言う。『資本は国外へおびえ出るであろう。そして、誤まって導びかれた労働者達が、手おくれにならないうちに止められなければ、彼らは彼ら自身及び我々に破滅をもたらすであろう。』ランズダウン侯は言う。『資本は保護されねばならない。資本の諸作用が自由にされないならば、それらが労働者の諸団体によって統制されることになるならば、資本はこの国を離れて、どこかもっと有利な国へ去るであろう。』」

Labour Defended Against the Claims of Capital; Or the Unproductiveness of Capital Proved with Reference to the Present Combinations Amongst Journeymen. By Thomas Hodgskin 1825. With an Introduction by G.D.H. Cole. 1922. p. 25.

鈴木鴻一郎訳『労働擁護論』（世界古典文庫35）日本評論社20頁。安藤悦子訳『労働擁護論』（世界思想教養全集5、イギリスの近代経済思想）河出書房新社345—346頁。

（2）「第三のパンフレット（ホジスキンの匿名の著書『労働弁護論』）[①]はついに、資本は不生産的であるという[②]リカードの叙述の必然的結論であるところの一般的命題を表明[③]している。これは、彼らにおいては、労働が価値の創造者であるというリカードの命題が、——リカードの叙述の一面を頼りにしつづけて——資本が価値の創造者であるという逆の命題に転化するところ[④]のトレンズ、マルサス等に対立するものである。同時に、スミスからマルサスまで一貫し、後者においては絶対的ドグマにまで誇張された（ジェームズ・ミルにおいても同様[⑤]だが）[⑥]労働の生活諸条件としての現存する量の資本への絶対的従属という命題に反対する議論[⑦]。」

Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, S. 264. Diez Verlag, Berlin 1962.

カウツキー版『剰余価値学説史』第三巻一九二一年（「リカードから俗流経済学へ」）との異同。

ディーツ版	カウツキー版（原書三一七頁。改造社、マルエン全集一一巻訳三二〇頁）
①（ホジスキンの匿名の著書『労働弁護論』）	①（ホジスキン）
②動詞がない。	②を形成する。（bildet）
③表明している。（ausbrechen）	③に到達している。（gelangt zu）
④彼らにおいては、（bei denen）	④彼らは（die）
労働が……という命題が、……資本が、……という逆の命題に転化する。（umschlägt）	労働が……という命題を、……資本が……という命題に逆転せしめる。（umschlagen lassen）
⑤（dito）	⑤（ebenso）
⑥生活諸条件	⑥生活条件
⑦Polemik gegen den……	⑦反対の議論をしている。Polemisiert ea gegen

（3）Cf. Hodgskin, op. cit., p. 55. 鈴木訳44頁。安藤訳362頁。

（4）Popular Political Economy, four lectures delivered at the London Mechanics' Institution, by Thomas Hodgskin, 1827, London, p. 19.

なお、労働は価値の唯一の源泉ではあるが富の唯一の源泉ではない。だから全労働収益権説は価値と使用価値の混同にもとづいているのである。これについては『ゴータ綱領批判』を参照せよ。

（5）彼はこの自然的所有権論をロックから受けついでいる。「かくして、ロック氏が主張する原理とは次のことである。即ち、自然は各個人に彼の肉体及び労働を与える。そして、彼が彼の労働によって作るか或は獲得することの出来るものは彼のものである。」

The Natural and Artificial Right of Property contrasted; a series of letters, addressed without permission, to H. Brougham, Esq, M.P. F. R. S. &c. (Now the Lord Chancellor.) by the author of "Labour Defended Against the Claims of Capital." 1832, London. p. 26. 以下 Nat. and Art. Right. と略記。

（6）「法律によって作られ、守られる財産権は自然的財産権とは区別されるものとしての人為的な或は法的な財産権である」。

Hodgskin, ibid., p. 55.

（7）「それ（法律—神代）は自然の賦与するものを特殊な・不正なやり方で着服するべく工夫された諸手段の一大体系である。」

Hodgskin, ibid., pp. 55-56. 傍点、神代。

（8）「労働者は常に、社会の現在の状態においては、それを獲得し所有するのに、自然からそれを買うのに必要なよりもはるかに大なる労働を与えねばならない。」

Hodgskin, Popular Political Economy, p. 220.

（9）「今や、我々はすべての歴史から次の事を知るのである。即ち、あの不正な着服、あの我々人類に課せられた労働の必要性から逃れるための一階級の人々における長くつづいてきたすべての試み、人間が自分自身の生産物を使用し、消費し、享受する権利のあのすべての侵害、それは悲惨な諸結果を伴ってきた。それは決して罰せられずにはすまされない自然法の侵害である。」

Hodgskin, ibid., p. 30. 傍点、神代。

（10）「それを管理することに対して支払いが要求される、その体系はかくも完全に搾取の体系であるので、現実の労働者は、自然が彼の努力に与える気まえのよい贈りもののうち、可能な限り小さな部分を彼自身の使用のために保持することを許されているだけにすぎない。」

Hodgskin, Nat. and Art. Right, p. 54.

（11）Hodgskin, ibid., p. 106.

（12）「自然と人為とを対立することは、ホジスキンの思想におけるアルファであり、オメガである。」ローゼンベルグ『経済学史』第二巻（直井武夫・広島定吉共訳、白揚社、四五一頁。

（13）Cf. Hodgskin, op. cit., p. 42.

（14）Hodgskin, ibid., see Letter the Fourth.

（15）ホジスキンはこれと関連して、「経済学の対象は富の生産に影響を及ぼし、それを規制するすべての自然的諸法則及び諸事情を発見することである。」（Popular Political Economy, p. 42）と述べ、又、「経済学は自然科学（natural science）であって、政治科学（political science）ではない。」（ibid., p. 263.）と述べている。

(16) ローゼンベルグ、前掲書、訳、四五三頁。

(17) エンゲルスはいわゆるリカード派社会主義者（ホジスキンもその一人であるが）について、彼らは「二十年代にリカードの価値論および剰余価値論を資本制的生産に抗するプロレタリアのために逆用」し「ブルジョアジーと闘うにブルジョアジー自身の武器をもって」したと述べている。

Karl Marx, Das Kapital. Zweiter Band, Friedrich Engels, Vorwort. 1885, S. 20. Diez Verlag, Berlin 1965.

『資本論』第二巻エンゲルス序言、長谷部文雄訳、青木書店、二三頁。

(18) 白井厚 野地洋行「トマス・ホジスキンの『労働擁護論』――その自然法思想と経済学について――」三田学会雑誌、第五一巻第九号、三三頁参照。

(19) 「労働の生産物の不正な分配。社会の指導者達はこの自然の原理（人口の原理のこと――神代）の中に彼ら自身の強奪の諸結果に対する言い訳けを見出して大いに御満悦であったのである。なぜならば、この原理なるものは、一方においては強奪の継続に対する口実を与え、他方では、あまり深く考えもせずに屈従することに対する口実を与えるので、我々人類のすべてのみじめさを彼らの大なる増加力のせいにしているその諸原理が広く採用されてきたし、従って、ここ最近の数年には『神』の知恵に対する人間の信頼を破壊すらしてきたからである。」

Hodgskin, Popular Political Economy, p. 93.

(20) Cf. Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, S. 293. Diez Verlag, 1962. カウツキー版 三五四―三五五頁。訳三五三頁。

(21) マックス・ベアはその著『イギリス社会主義史』(Max Beer, A History of British Socialism, p. 260.) の中でこの時期を一八二〇年～三〇年とみており、エリー・アレヴィはその著『トマス・ホジスキン』(Élie Halévy, "Thomas Hodgskin," pp. 79-80. Eng. trans. by Taylor. p. 84.) の中で一八二三年～三二年とみているようである。

(22) 「法律と抑圧は同じ手の仕事である。立法家の代弁者によって、そして彼らの利益のために法律が作られるところの社会の階級によって表明された怒りは……。」Nat. and Art. Right, p. 45. 傍点、神代。

(23) ホジスキンは一八三三年以後は次第に労働運動から離れ、自由貿易主義者になっていった。そして、労資の和解を主張するようになり、『労働弁護論』において表明された労働者階級の輝かしい闘争宣言は跡かたもなく消え去ってしまう。しかし、彼の国家批判、法律批判はなお残るのであり、それが晩年の刑法論になったのである。これについては、アレヴィの『トマス・ホジスキン』に詳しく述べられている。Cf. Élie Halévy, "Thomas Hodgskin." 1903, pp. 137～188 特に 161～2, 164, 168. Eng. trans. pp. 127-165 特に p. 145, p. 147, p. 150 以下。

なお、ホジスキンの刑法論には次のものがある。

① What shall we do with our criminals? Don't creat them. A lacture delivered at St. Martin's Hall, May 20th 1857, by Thomas Hodgskin.

② Our chief crime: cause and cure. Second lecture, on what shall we do with our criminals? Delivered at St. Martin's Hall June 3, 1857.

(24) 「立法者の野望と貪欲はりょうがされた。それは自然法の慈悲ぶかい作用によってりょうがされた。このことばはのちにカール・マルクスによって古典的に展開された唯物史観の基本的観念をふくんでいるように思われる。なぜならホジスキンがいおうとしているのはこうだからである。すなわち、社会の社会的・経済的下部構造は変化した。したがってまた、法律的上部構造は、けっきょく必然的にそれに照応する変形をこうむらなければならなかった。」(W. Stark, The Ideal Foundations of Economic Thought, p. 93. 杉山忠平訳、一三七頁)

「要するに、ホジスキンにとっては歴史的諸要因のうちで、その影響が支配的であるものは、政治的でも法的でもなく、又、倫理的でも宗教的でもなくて、経済的要因である。ホジスキンの歴史哲学は、彼がそれを『文明の歴史』或は『進化しつつある動物として考えられた人間の自然史』と呼んでいるものであるが――言葉の正確な意味において史的唯物論である。」(Élie Halévy, op. cit., p. 148. Eng. trans. p. 134.)

(25) 「ベイコン卿及びロック氏の哲学の指導的な諸原理、それらは……同一のものだが、即ち『人間は自然の翻訳者にすぎない。』及び『外的世界についてのすべての我々の知識は我々の感覚諸手段によって獲得される。』或は『それはその世界の模写である。』……」Hodgskin, op. cit., p. 105.

「財産という概念は、以前に生じた外的事実から模写された。」Hodgskin, ibid., p. 106.

(26) ホジスキンにおいては歴史の進化の起動力として、人口増加→知識・発明→分業→生産力の発展が考えられており、これにもとづいて『自然的財産権と人為的財産権比較論』の第四の手紙では土地における財産権の変化が述べられている。又、第五の手紙においては次の如く述べている。「……科学における諸発見及び技術における諸改良は我々の政治的状態における最大の諸変化を生じた……。」Hodgskin, ibid., p. 91.

(27) ホジスキンの歴史観については、平尾敏氏が『法経論集』(三一号「トマス・ホジスキン研究――経済学と自然法思想」一八九頁(七)で述べているが、氏は大体において、ローゼンベルグと同じ見解のようである。しかし、ローゼンベルグが「ホジスキンの歴史観全体は徹頭徹尾観念論的である。」（ローゼンベルグ前掲書四六〇頁）と述べているのは疑問である。ホジスキンの歴史観はむしろ機械的唯物論に立脚した進化論であって、観念論的要素も含まれているが、全体としては観念論そのものではない。鎌田武治氏は、ホジスキンの歴史理論は主観的・目的論的であり、各社会の発展の内的必然性が明らかでなく、進化の理論はあるが革命の理論はない（「トマス・ホジスキンの資本主義批判体系」『エコノミア』第16号一一四頁）と述べているが、平尾氏とほぼ同じ見解であり、大体において正しい見解と思われる。

また、ホジスキンは人為的財産の発生を北方民族の侵略と征服による土地独占に帰しているが、これは暴力史観であって、エンゲルスが『反デューリング論』において詳細に批判しているものである。ホジスキンと同じような見解はチャールズ・ホールにもみられる。

(28) Cf. Hodgskin, op. cit., p. 101.

している。私は彼らとともに、労働によってその努力の全生産物を所有することは個人的競争と両立しないと考える。」William Thompson, Labour Rewarded. The Claims of Labour and Capital Conciliated: or how to secure to labour its whole produce of its exertions by one of the idle classes, London 1827, p. 97.

(33) Cf. Labour Defended. pp. 38—66. p 108. 鈴木訳31～53頁。86頁。安藤訳、352頁～368頁。391頁。

(34) 「ホジスキンは（ブルジョア経済学者に反対する）彼の論争において経済学者達の偏狭固陋な考え方にもとづいている。」Karl Marx, Theorien über den Mehrwert, Teil 3, S. 263, Dietz Verlag, Berlin 1962.

カウツキー版（三一六頁、訳三一九頁）では、「（ブルジョア経済学者に反対する）」がない。

(35) Cf. Marx. a. a. O., S. 265. カウツキー版三一八頁、訳三二一頁。

(36) Cf. Marx, a.a.O., SS. 273—4. カウツキー版三二八—三二九頁、訳三三〇頁。

(37) Cf. Marx, a.a.O., S. 274. カウツキー版、三二九頁、訳三三〇頁。

(38) 「さて、この『理想主義（イデアリスムス）』を『この途方もない靴直し①』マカロックにおいて、リカード理論が帰結するところの②粗野な物神崇拝と比較してみよ。そこでは（物神崇拝—神代）人間と動物との区別のみならず、生きているものと事物との区別も③消滅するのである。しかも、それについて、人は、ブルジョア経済学の卓越した精神主義に対するプロレタリアの反対は、粗野な、もっぱら獣的要求に向けられた唯物主義を説教するなどというのだ！④」。

Marx, a.a.O., S. 265. カウツキー版三一八頁、訳三二一頁。

『剰余価値学説史』対照表

ディーツ版	カウツキー版
①Schuhflicker（靴直し）	①Schmierer（くそ学者）
②worin	②wozu
③der はなし	③sogar der
④gepredigt [hat]!	④predigt!

(39) ホジスキンは、ところどころで資本を即自的にではあるが、事実上は生産関係として理解しているとみられるところがいくつかある。例えば『人民の経済学』第十章資本蓄積の諸結果を参照せよ。従って、私はローゼンベルグが「ホジスキンの場合には、一の生産関係としての資本の規定は、不明な形でも如何なる形でも見あたらない……」（ローゼンベルク前掲書四六八頁注（一））と述べているのは、ホジスキンに対する過小評価の感がする。しかし、勿論ホジスキンが正しくそれを認識したわけではない。それは彼の自然的財産及び人為的財産という対比の仕方からくる当然の限界である。ただ、彼はそのようなものを通してであるが、資本の本質に接近しているということである。

(40) ホジスキンにおいては、例えば利潤と封建的な地代との間には何の本質的区別もなく、ただ取得者が違うのみである。

二、生産力論

ホジスキンの経済学のうち生産力論に該当するものは生産的労働論、知識論、分業論、商業論であり、知識論及び分業論の中には人口論が含まれている。以下、彼の生産力論を順にみてゆくことにしよう。

(1) 生産的労働論

ホジスキンにおいては生産的労働論はとりわけ重要な意義をもっている。それは彼が資本の不生産性を論ずるにあたり、生産手段及び生活手段として把えられた資本に対して、生産的労働を対置させているからである。ホジスキンにとっては社会的分業及び商品生産は自明の前提である。そして、彼はこの前提のもとに生産的労働を次の如く規定する。「労働者の生活を維持するすべての労働は生産的である。(1)」ここでは彼は商品を生産する労働が生産的であるということを意図していた。彼が「労働者の生活を維持する」という場合、決して、労働者が自身の消費資料を作るという意味でないことはいうまでもない。(2) 彼はこの場合、労働が本源的な購買貨幣(3)であるという彼の価値論に従って生産的労働を規定する視点にたっていた。しかしながらホジスキンにおいては価値形成過程と労働過程は区別されていない。そして、前者は後者に解消されてしまう。そのために、彼自身は、商品を生産する労働が生産的であると主張する場合（正しくは価値を生産する労働を意味すべきであったのに）他人もしくは自身の使用価値を生産する労働即ち共存労働(4)（co-existing labour）

を意味したのである。ホジスキンにおいては、商品生産は価値生産として理解されずに使用価値生産として理解されている。これは彼が商品生産を生産の特殊な歴史的形態として認識せずに自明のものと考えたことから生ずるのであって、彼の小商品生産者的な立場のあらわれである。従って、ホジスキンのいう生産的労働は労働過程の担い手としてのそれを意味する。彼はこのことを、労働のみが富を生産し、労働は人類生存の永遠の条件であると、正当にも主張している。[5] 彼はそれから、この労働の内容について述べるのであるが、まず彼は労働を二種類に分ける。第一は、物質世界の諸法則を観察する労働即ち精神労働であり、第二は、そのような観察によって与えられたものを実行に移す労働即ち肉体労働である。そして従来はそれらのいずれかが、それぞれの担い手によって偏重されてきたが、これは誤まりであると述べている。ホジスキンはここで資本主義社会における肉体労働と精神労働の対立という事実を認識した。しかし、彼はそれがいかにして生じるのかについては何も解明していないし、それぞれの担い手の偏見のせいにしているのである。ホジスキンはその後で精神労働を熟練及び技術の習得、さらに機械の発明に結びつけ、[6] 肉体労働の例証として、絹織工、機械製作者、農夫、石切り人、綿紡績工等をあげている。又、彼は熟練は継承されると主張している。[7] このように彼は生産的労働の内容について述べた後に、どの労働が最も生産的ということはいえず、すべてが有用であると主張している。彼は基本的には、労働過程の担い手としての労働、及びそれに関連した精神労働を述べているが、労働過程の把握が不充分なため、有用労働一般に拡大してしまい正しい理解を妨げている。特に彼は精神労働を重視し、[8] 過大評価しており、又、拡大解釈している。彼が生産的労働を広く解釈しすぎているのは、労働過程の把握の不完全さと同時に、彼が常に労働者に生計を与える労働という規定を出発点においてもっていて、それが極めて個別的観点から把握されており、従って、結局のところ、彼は労働者の生計を維持する労働ならばあらゆる労働が生産的であると考えるからである。従って、彼の生産的労働の規定は「スミスよりもはるかに劣ってゐる」[9] といわれるのである。ホジスキンはしかしながら他方において、資本主義社会においては、資本家に対して利潤を生じない労働は生産的ではないという見解のあることを主張している。[10] しかし、彼は、最初の規定と、この新たな規定を単に対立的に述べているのみであり、その関連は何も把まれていない。これは彼の、自然と人為の対立という図式からして当然である。全体としてみるならば、彼の生産的労働論においては熟練労働者を中心とする小商品生産者の立場が反映しているといえよう。

(2) 知識論

ホジスキンの生産力論においては知識及び観察とその結果としての発明の生産力に及ぼす影響が極めて重視されている。これは彼の生産的労働論における精神労働の重視と結合しているのであり、又、熟練労働の重視とも結びついている。又、これは彼の生産力論の特徴であるが、彼においては知識や発明の生産力に及ぼす影響があまりに過大評価されている。このような考え方についてはエンゲルスが『反デューリング論』の中で、発明と発見が労働の生産性を高めるということはしばしばあるが、そうでない場合もある。しかし、どちらにしても、このようなことは経済学の法則などといえるものではなく、わかりきった陳腐なことであると述べている。しかし、ホジスキンの知識論はそれにつきるものではない。そこに彼の知識論の積極的側面がある。即ち、彼によれば従来の経済学者達はスミスにしてもマカロックにしてもセイにしても知識の生産力に及ぼした影響を述べてはいるが、知識の増加が何らかの一般的な法則によって規制されると考えずに、偶然の思いつきのように考えているところに誤まりがあるのである。従ってホジスキンの知識論は生産力に及ぼした知識の影響の例証と、知識の進歩を生ずる一般的・自然法則の二つから構成されており、後者が重視されている。このような観点にたって知識論を展開したことは彼のすぐれた面といえよう。

彼は農業における播種期、収穫期、土壌の性質、穀物の性質等に対する充分な知識の必要性、じゃが芋の導入、トウモロコシの導入の影響等を述べ、又、磁石の発明とそれに伴う航海術の改善、その結果としてのかつてはヨーロッパではぜいたく品であったお茶の価格の下落について、及び蒸汽機関の発明と木棉マニュファクチュア、一七六七年のスピニング・ジェニー、一七六九年の力織機、一七七九年のミュールの発明及びそれらの機械が生産力に及ぼした影響を述べている。さらに彼は安全灯及びガス灯の発明と気体化学の進歩について述べている。そして、彼はサー・ウォルター・ローリー、アーサー・ヤング、リチャード・ハーグリーヴス、アークライト、ジェイムズ・ワット、プリーストリーのような発明家や知識人の役割を極めて高く評価している。ここには産業革命期の経済学者としての彼の特徴がよく出ているのである。しかし、これだけならば、他の経済学者達とあまり変わらない。ホジスキンはこの後で、知識の進歩は一般的自然的法則によって規定されること、ワットやプリーストリーの如き個々の天才といえども決して偶然の産物ではなくて、一般的な社会の進歩の結果であることを述べている。彼は、知識を規制する法則について、スミスは有用な発明を分業に帰しているが、それは誤まりであり、知識や発明は分業に先行すると主張する。勿論、彼は分業が知識及び発明に及ぼす影響も認めているが、根本的には後者が前者に先行すると考えるのである。彼は人類は未開の段階から、文明に到るまで一様の進歩を遂げてきたこと、即ち、採拾→狩猟→牧畜→農業→製造業及び商業といった過程を経てきたことを述べている。[11] そして彼はこれらの技術的進歩及び改良は永遠の自然法則の結果であり、発明や改良をひきおこす事情は、人間の生存の法則である労働に対する必要性と人口の自然的増加の結果であると主張する。彼によれば、この過程は、人口の増加→必要の増加→知識・発明の増加である。「必要は発明の母であり、必要の絶えざる存在は人口の絶えざる増加によってのみ説明される。」[12] 彼はこの他に、地理的位置の特殊性や言語、人間の諸組織の多様性も知識の進歩を規制するが、人口の増加ほど決定的ではないと主張する。又、コミュニケーションの発達は人口の増加と同じ役割

を果す。彼はこのことを「三人よれば文珠の知恵」[13]という諺で示している。彼は又、天才について、ワットを引きあいに出しているが、ワットが蒸汽機関を発明し得たのは、彼が天才であったことよりも一八世紀に彼が生れたこと、それ以前の諸発見や、特に化学の発展に負っていること、又、それらの発明を応用するための機械や熟練労働の存在、及び商業上の需要の存在に負っていると述べている。ホジスキンが知識の増加や発明を人口の増加にもとづく、必要の増加から導き出していることは、あまりにも単純で機械的ではあるが、知識の進歩や発明を社会の一般的進歩の中で把えていることは卓見である。彼はこのように、人口の増加を生産力発展の決定的モメントとすることによってマルサス流の人口論に対決したのであった。

(3) 分業論

ホジスキンの分業論は生産力を発展せしむるものとしての分業、分業を生ずる自然的諸原因及び分業の限界としての市場の範囲、分業のもう一つの限界としての仕事（エンプロイメント）の性質及び地域的分業から成り立っている。彼はまず、分業が生産力を増加させることについて、スミスの見解をマカロックから引用している。第一に分業は特殊な労働者の熟練及び器用さを増加させる。彼はここでスミスのピン製造の例を出している。第二に、一工程から他工程への移動の際の時間を節約する。第三に、労働を縮小し節約する。そして、機械の発明を容易にする。この後で彼は、毎日の実践からの例証を行っているが、その際彼はスミスと同じく仕事場内の分業と社会的分業を混同している。

次に彼は分業の発生について述べる。彼によれば分業は何らかの普遍的で自然的原理から生ずる。そして、それに関して彼は性、年齢、健康、肉体的及び精神的諸力、才能と趣味の多様性をあげている。そして、彼によれば社会の進歩の中でこの種の分業の諸原因は絶えず拡大されている。この後で彼は交換は分業の必然的な結果であって原因ではないと主張し[14]、その点でスミスと意見を異にしているが、彼のこの見解は商品交換の必然性を分業から説明するものとして卓見である。彼はここまで述べてきた分業を個人的分業（individual division of labour）と名づけている。次に彼は分業の限界について述べている。その第一は彼によれば市場の範囲であり、第二は仕事の性質である。市場の範囲は単なる消費者の数によってではなくて、欲する商品を獲得するために自身の、もしくは他人の労働の生産物をもっている人々の数即ち労働者の数と彼らの生産力によって規定される。そして、ホジスキンは、各人の諸要求は制限されているので、後者よりは前者が重要であると主張する。彼によれば労働者の数は人口の増加とともに増加する。従って結局のところ分業は人口の増加にともなう市場の範囲の拡大によって絶えず拡大されることになる。又、彼によれば交通手段の発展は人口の増加と同じ効果をもつのであり、これは知識の場合と同様である。彼は結局、生産力の発展を人口増加にもとづく知識と分業の拡大に帰着させている。又、人口の増加は市場の拡大のみならず、諸個人の諸性質の多様性を通じて分業を拡大する。彼は分業の第二の限界として、仕事（エンプロイメント）の性質そのものから生ずる限界を指摘している。しかし、彼は知識の進歩と機械の発明によってこの限界は遠ざけられ、分業の拡大と労働の単純化をもたらすと述べている。彼はこの種の限界を例えば農業における停滞の原因としてあげているが、土壌、気候、土地に含まれている鉱物、地球の自然の産物等の特殊性によって、特定の地域は特定の部門にのみ適していると述べ、これを地域的分業（territorial division of labour）と名づけている。これは技術の発展とともに遠ざけられるのではあるが社会の進歩のあらゆる段階に存在している。又、地域的分業は交換を伴わずにも存在するが、自然の指示に従えば交換は利益であり好ましい。なぜならば交換によって、各人は最も利益のある生産に専心出来るからである。この種の分業は土地の政治的分割とは一致しない。そして、自由な交換が政治的に妨げられるとすると、交換の利益が失われ、生産力の発展を阻害するのである。彼はこのことをイギリス及び革命後のフランスとドイツ及びスペインとの比較において論じている[15]。最後に彼は、あらゆる労働者は相互に依存しあっていると述べているが、これは彼が『労働弁護論』で述べている共存労働（co-existing labour）の概念に他ならない。彼の分業論にはそれほど独自的なものは含まれていないが、人口の増加との関連で論じられている点が重要であろう。

(4) 商業論

ホジスキンは商業は本来は経済学の対象にはならない。なぜならば商業は原材料に何ら価値を附加しないからである。従って商人は「単に利得のために購買し販売するのみの人々」[16]であって、運輸業者とは異なると正しく述べている。しかし、彼は商業に対して不当な偏見が存在しているので、商業を生ずる自然的諸事情及び商業の効用を明らかにしなければならないと主張している。彼は商業を分業にもとづく交換の必然性から生ずるものとして述べている。分業と商業の間には、彼によると次の如き照応関係がある。

① 個人的分業――ホーム・トレード（home trade）――小売（retail）

② 地域的分業――フォリン・トレード（foreign trade）――卸売（wholesale）

この場合、通常はホーム・トレードは国内、フォリン・トレードは外国間の商品交換と理解されているが、これは彼によると非科学的な恣意的な規定の仕方であって、二種類の分業にもとづいて、事物の本性より生ずる区別をしなければならないとされる。

小売商人（retail dealers）について彼は次のように言っている。社会的分業にもとづく諸商品の生産においては生産期間が諸商品によって異なり、又、諸商品の耐久性も異なるので、ある商品は直ちに売られ消費されねばならないが、他の商品は数ヶ月も市場においておける。ところが労働者の欲望は毎日更新されるのであり、この矛盾をどう解決するか、特に生産期間の長い部門の労働者は日々の生活手段をどうやって獲得するかが問題である。小売商人は諸商品の効用及びそれらの所与の量が消費される時期、時間を熟知しており、消費者諸個人の需要の範囲にも通じている。製造業者は小売商

人の測定した需要にもとづいて諸商品の供給量を決める。従って、小売商人は諸商品の需要と供給を均衡させる。彼らはこのことを出来る限り安く買うことによって、従って無駄を省くことによって行うのであり、その倹約が彼らの利潤になるのであるが、この倹約は社会的にも利益であると彼は主張する。又、小売商人は生産物を消費に適した形や量にする労働をも行う。

卸売商人（wholesale dealers）はどうか。彼は卸売商人の効用を述べる前に遠隔地の商品交換の利益について述べている。すべての人々は相互に依存しあっているのであり、地域的分業のあるところでは、諸風土、異なる諸地方の産物は交換によってのみ人々が享受しうるものである。それだけではなく、商品交換は購買者の側における等価商品の生産を当然必要とするから、販売者の側で技術の改良が生じ商品が安く作られるならば、それは購買者の側における利益となると同時に、購買者の側の技術進歩をも刺激するというのである。かくして彼によれば商業は土壌、気候、土地の自然的産物における多様性から生ずる自然現象である。彼は卸売商人をこのような交換の利益を実現する担い手として述べている。卸売商人は遠く離れていて見ず知らずの生産者達が、その商品に対する市場を確実にみつけ、その需要を知ることが出来るように生産者に代わって行うというのである。商人は諸商品が最も必要とされる所に移される結果、増加せる価格によって利潤を支払われる。さらに彼らは安く買い高く売るという自由競争の原理に従って利己的に行動する結果、価格の諸変動を調整し、又、必要な時に売ることによって、食糧不足をなくし、救済倉（public granary）と同じ役割を果たす。かくしてホジスキンによると商業は間接的に生産を助ける生産的労働であり、精神労働がその中心であるという。[17]

商業論においては自由競争讃美者としての彼の特徴がよく出ている。彼はここではまず、生産物（使用価値）の交換と商品交換とを混同し、生産物交換の利益を特殊な・交換の歴史的形態である商品交換の利益と同一視している。さらに又、彼は自由競争にもとづく商品生産そのものから生ずる価格変動を自由競争によってなくすことが出来るかの如き幻想を抱いている。ここにアダム・スミスの信奉者としての彼の空想的側面がもっとも顕著に表われているといえよう。又、ここに、彼の階級的基盤が小商品生産者であることを示す一つの論拠がある。

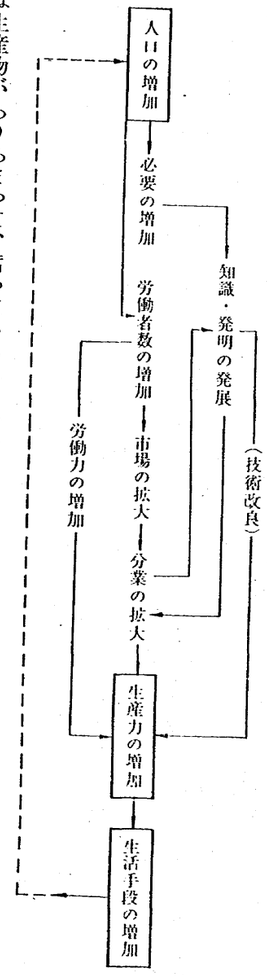
注(1) Hodgskin, Popular Political Economy, p. 52.
(2) Cf. Hodgskin, ibid., p. 50.
(3) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 21.9—20.
(4) Cf. Hodgskin, Labour Defended. p. 38. 鈴木訳31頁。安藤訳352頁。
(5) 「もし、我々が労働をしないならば、我々はいかなる食物も持つことは出来ないし、不可避的に死滅しなければならない。……それは永遠に常に、すべての人類の行為を規制し、それに影響を及ぼす。……我々は額に汗してパンを食べねばならないということは我々の生存の法則である。だが、それは我々の労働に対してパンを与えるであろうし、労働に対してのみ与えるであろうということは、相互に外的世界の法則でもある。」

Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 27—28.
(6) ホジスキンは『労働弁護論』の中では、固定資本の活用にとって必要な三要因として、第一に、機械の発明に要する知識と発明の才、第二に、発明を実行に移す手の熟練と巧妙、第三に、道具を使用する熟練と労働をあげている。
Cf. Hodgskin, Labour Defended, pp. 63—64. 鈴木訳51—52頁。安藤訳366—367頁。
(7) Cf. Hodgskin, Popular Political Economy, p. 48.
(8) 「……単なる労働ではなくて、精神的熟練が、或は労働がそれにおいて導びかれる様式がその生産力を決定する。それ故に、私はわが労働者仲間達が労働という語を手の働きに限定しないように注意したい。」
Cf. Hodgskin, Labour Defended, p. 87. 鈴木訳69頁。安藤訳379頁。
(9) ローゼンベルグ『経済学史』第二巻（直井武夫・広島定吉訳白揚社、第二巻四五五頁。
(10) 「例えば、労働は労働者が、彼が使用し、もしくは消費するいかなるものであろうと、その再生産に加えて、又、自身の満足なる生計に加えて、生産中に彼が使用し、もしくは消費する全資本に関して、資本家に利潤をも又、与えるのでなければ、又、彼の労働が彼自身の満足なる生計を充足するよりはるかに多く、現在の社会状態の下で生産するのでなければ労働は生産的ではないし、事実、労働者は働くことを認められないということが主張される。」
Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 51—52.
(11) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 83—84.

Cf. Hodgskin, Nat. and Art. Right, the fourth letter.
(12) Hodgskin, Popular Political Economy, p. 86.
(13) Hodgskin, ibid., p. 94.
(14) Cf. Hodgskin, ibid., p. 114.
(15) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 134—135.
この点についてはホジスキンの著書『北ドイツ旅行記』（Travels in the North of Germany. 1820）に詳細に論じられている。なお、安藤悦子「トマス・ホジスキンにおけるドイツとイギリス」『経済科学』第10巻3号参照。
(16) Hodgskin, ibid., p. 145.
(17) Cf. Hodgskin ibid., pp. 160—161, p. 172.

三、生産力の発展と労働者階級の状態及び生産力の発展の阻止的要因

産業革命の確立期の経済学者としてのホジスキンは、一方においては、機械が発明され、大工業が成立して、生産力が非常に発展したにもかかわらず、他方において、労働者及び農民は極貧の状態にあるという矛盾する現実にぶつかった。彼はこれをどう理解するべきかということを常に彼の中心的な課題としていた。彼はこの問題を自然と人為の対立という考え方において把える立場にたっている。彼によれば、人類が自然の法則に従うならば、生産力は無限に発展するのである。その際、彼が採用したのは次の如き収穫逓増の図式である。[1] 従って、ホジスキンにとっては、労働者階級の貧困は決して、自然の法則によるものではない。彼はこのことを一八二五年の恐慌



の中で、一方には生産物がありあまって、腐っているにもかかわらず、他方では飢死する人間がいるということを認識したことによって確信した。[2] それだから、ホジスキンはマルサス流の人口論[3]や、収穫逓減の法則[4]に反対した。従って又、これは彼が『労働弁護論』において賃銀基金説を批判する際の基底にあるものなのである。又、彼は分業による相互依存が労働者階級の貧困の原因であるとするシュトルヒに対しても、分業による相互依存と労働者階級の隷属とは別であり、労働者の貧困は後者によるものであるとして批判をしている。[5] かくして、ホジスキンにとって、貧困は自然的なものではなくて徹頭徹尾人為的なもの、特定の社会的諸制度によるものであった。そして、彼は労働者階級の貧困を資本家の搾取に、そして、資本家の資本蓄積（複利）に帰することによって正しい洞察を示している。[6] これは彼がとり入れたリカード理論からの帰結であった。[7] ホジスキンはさらに、このような搾取と労働者及び農民の奴隷状態は生産力の発展を阻害すると主張している。[8] 生産力の発展を阻止する要因としてホジスキンは、第一に、労働者や農民の貧困な状態が人口の増加を妨げて、彼の収穫逓増の図式の最も根本的な要因を阻害すること。第二に、労働者や農民の貧困は複利による過剰蓄積とともに過剰生産を生ずること、[9] 従って、生産力が遊休すること。又、搾取者の介在によって労働者相互の交換が縮小し、市場の範囲が縮小して、[10] 分業の発展を妨げること。第三に、現在の社会状態（即ち資本主義）[11] においては利潤を得て生産される量が生産の制限をなしていること。第四に、彼はその他の社会的諸規制（social regulations）をあげている。例えば、[12] 自由な交換に対する制限が地域的分業の利益を常に制限していること。或は例えばアイルランドにおいては労働者が貧困なばかりでなく、政治的な抑圧、宗教的な抑圧等をうけていることが生産力の改善を阻害していることを述べている。[13] 例えば思考の自由や出版の自由に対する政治的抑圧は知識の進歩を妨げ生産力の発展を阻止するのである。[14] さらに彼は少数地主の土地所有は分業の発展を阻止し、生産力の発展を阻止すると主張している。[15] このようにホジスキンはマルサスやシュトルヒのような俗流経済学者とは違って、資本主義における生産力と生産関係の矛盾を洞察していた。しかし、彼はそれを生産力と生産関係の矛盾として把えることは出来ず、自然と人為の対立として把握したのである。だから、彼は資本主義社会においては生産力の発展そのものが労働者を搾取する手段に転化するのだとは毫も考えなかった。彼にとっては生産力の発展は無条件に喜ばしいものであり、[16] 労働者の貧困は「しゃくにさわる諸制限（vexatious regulations）」[17] によるもの、即ち、自然に対する人為の不当な侵害だったのである。だから、彼においては資本主義における搾取の影響と、封建的抑圧の影響とが本質的に異なるものとして理解されていない。もっとも、結果的には彼は資本主義における矛盾の把握にかなり鋭く切りこんでいることは事実である。

注（1）鎌田武治「トマス・ホジスキンの資本主義批判体系」『エコノミア』第16号97頁、105頁参照。

（2）「小麦はポーランド及び世界の他の部分で腐りつづけた。……小麦の所有者達が喜んでそれを交換したあの諸商品を生産する力はあまりにも大きくなってしまったので、その作業は極めてしばしば制限され或は全く中止された。そして、この力がその手に眠っている人々は外国で腐ったあの小麦の欠乏のために死んでしまった。それ故に、我々人民のうけている困窮及び我々すべてが不平をもっている貧困は、自然によってひきおこされるのではなくて、労働者をして彼の生産力を働かせることを認めず、彼からその果実を奪いとる特定の社会的諸制度によってひきおこされるのである。」

Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 267—8. 傍点、神代。

（3）一、の注19参照。

「人口の増加がヨーロッパにおける貧困、みじめさ、悲惨の起源ではありえない。」

Hodgskin, ibid., p. 123.

「大抵の政治経済学者達によって人類の数の増加の必然的な結果であるといわれているあの生活手段獲得の増大する困難さに対しては、少なくとも充分な補償がある……。」

Hodgskin, ibid., p. 121.

Cf. ibid., p. 120.

（4）「……生産力は土地が利用されるにつれて、又、人々が増加するにつれて減少するということが一般に言われている。そのような見解は、分業の諸効果及び知識の進歩を考慮していないことからして全く誤まりである。それはただ土地に目を向けるにすぎない。土地の力についていえば、生産を助ける用具としては、我々は蒸汽機関が発明される以前の大気の生産諸力についてと同様、殆んど何も知らないのである。」ホジスキンはここで、収穫逓減の法則に対する批判を行っている。

Hodgskin, ibid., p. 102.

（5）「それ故、不平をいわれ嘆かれる従属というのは貧困及び隷属の従属であって、分業によって生ずる相互依存ではない。」

Hodgskin, ibid., p. 138.

ホジスキンは分業による労働力の畸形化と、それにともなう労働力の資本への従属を見ていない点であまりに楽観的すぎるが、階級的隷属と分業による相互依存を区別したのは卓見である。

（6）Cf. Hodgskin, ibid., p. 52.

「しかし、分業から生ずるあらゆる利益は自然的には労働者達に集

中し、彼らのものなのだから、もしも彼らがその利益を奪われ、社会の進歩の中で、決して働かないもの達のみが彼らの改良された熟練によって富むとするならば、このことは不正な着服から、富める側における搾取と略奪から、そして貧困の側における屈従の承諾から生じるに違いない。」

Hodgskin, ibid., pp. 108—109.

ホジスキンは複利（compound interest）の圧倒的な要求について述べた後に、「それは、社会の法律によって是認され、人間の習慣によって是認され、立法によって強制され、経済学者達によって、熱心に守られている資本の諸要求の圧倒的性質であり、それは今までも、今も、そしてそれが認められ、黙従される限りは永遠に労働者を貧困と悲惨にとぢこめるであろう。」と言っている。

Hodgskin, Labour Defended, p. 80. 鈴木訳64頁。安藤訳376頁。

(7) 「……なぜならば、彼（リカード……神代）の理論は私がたった今なした観察即ち、資本家の搾取が労働者の貧困の原因であるということを確認するからである。」つまり、ホジスキンはリカードの理論における労賃と利潤との逆比例からこの結論に達したわけである。

Hodgskin, ibid., pp 80—81. 鈴木訳64頁。安藤訳376頁。

(8) Cf. Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 120—121.

(9) 「何故、わが人民の半数に仕事がないかという理由は、他の半分が、本来なすべき二倍を働くからである。世界の市場は彼らの勤労の生産物で過剰蓄積になっている。生産は常に自身の市場をつくるというのが経済学者の格言である。しかしこの格言は何人も、販売もしくは購買の意図なしには生産しないという想定から由来している。それ故にそれは、生産することを強制されるが享受することを認められぬわが労働者には通用しない。」

Mechanics' Magazine. 1823年9月6日. Élie Halévy, op. cit., p. 81. Eng. trans., p. 85.

(10) Cf. Hodgskin, Popular Political Economy, pp. 116—117.
ホジスキンは(9)とゝこで販路説を批判している。

(11) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 51—52.
Cf. Hodgskin, ibid., pp. 245—246.

(12) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 161—162. pp. 166-167. 二の注(15)参照。

(13) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 123—124.

(14) Cf. Hodgskin, ibid., pp. 98—99.

(15) Cf. Hodgskin, ibid., p. 135.

(16) 安藤悦子氏はホジスキンの機械観を「機械の生産力をみとめたうえで、ラダイツ運動にみられた反体制感情を理論的認識にまでたかめるという体制批判をともなった肯定的な機械観」と主張している。

安藤悦子「イギリスにおける労働者教育運動の成立——職工学校運動とその思想的背景」『歴史学研究』第272号、一九六三年一月、一頁。

(17) Hodgskin, op. cit., p. 139.

むすび

以上、ホジスキンの生産力論について論じてきたが、彼においては、生産力の発展——自然、生産力の停滞——人為として把えられているため、資本主義社会における生産力の発展を積極的なものとして理解したこと自体は正しいにもかかわらず、結局、生産力の発展が資本主義社会において有している意義については、その肯定面も否定面もともに正しく科学的に把握されなかったし、後者は全く見失われてしまった。彼においては生産力論と自由主義が結合して、人類の未来に対して極めて空想的な展望が抱かれている。従って、資本主義批判家としては、彼は科学的な側面をもっていたにもかかわらず、改革者としては全くのユートピアンであった。

〔付記〕『労働擁護論』の引用は鈴木訳、安藤訳を参照して、コール版から訳した。なお、ホジスキンの価値価格論、貨幣論、資本論、については別に稿を改めて論ずる予定である。（資本論についてのみは、本誌八月号に発表のはず。）又、指導教授である遊部久蔵先生には、貴重な文献をいくつか貸していただき、重要な御助言をいただいた。ここに深く謝意を表する。